

「は JOMON



縄文の「J」

平成18年
7月18日(火)から
9月15日(金)まで

入場無料

開館時間 午前10時から午後4時30分まで

休館日 月曜日

取手市埋蔵文化財センター

〒302-0007 取手市吉田383番地

電話 0297(73)2010

ファックス 0297(73)5003



JはJOMON縄文のJ

縄文文化は日本独自の先史文化で一万年以上の長い期間、途切れたり民族が交代したりせずに、外国から影響をうけないオリジナルな文化を継承しました。

縄文人は文字をもたず、絵画もほとんど描くことがなかったため、表現力に乏しく、他者に対するメッセージのない沈黙の文化であると思われていますが、じつは彼らの主張は彼らがつくりだす大量の土器にこめられていました。縄文人は、粘土をこね、土を焼いてたくさんの縄文土器を作りました。そのひとつひとつに文様が描かれ、あるいは立体的な土偶（土の人形）、小型土器など表現豊かな土製品をつくりだしながら自分たちの思いをそこに込めました。

今回の企画展は上高井神明遺跡など最近の発掘出土品を中心に縄文土器や土製品をつうじてそこに表現された「縄文人のメッセージ」を探ります。

講演会 9月9日(土) 午後1時30分から

「日本考古学における茨城県遺跡の役割 陸平貝塚を中心に」

講師：美浦村生涯学習課文化財保護係長 川村 勝氏

会場：埋蔵文化財センター2階 講座室／予約不要 先着40名

ワークショップ 8月19日(土) 午前10時から午後3時まで

「縄文土器・土偶をつくる」

縄文土器に使われたものと同じ粘土を使って、土器や土偶を作ります。

会場：埋蔵文化財センター2階 講座室（昼食・飲み物はご自分で用意してください。）

材料費：大2kg 800円、小1kg 400円（材料費は申込書にしたがって当日払ってください。）

定員：30名／要予約

はがき・ファックス・インターネットメール・来館申し込み のいずれか

*電話は不可 予約受付期間は7月中です。応募多数の場合、抽選となります。

*必要事項：住所・氏名・電話番号・年齢・その他同行者のある場合、その氏名・材料の大小 を記入して上記のいずれかで申し込んでください。

ファックス専用電話番号：0297（73）5003

はがき・封書宛先：〒302-0007 取手市吉田383番地 取手市埋蔵文化財センター

インターネットアドレス：maibun@city.toride.ibaraki.jp

縄文イラストレーターさかいひろこさんの作品が展示されます。

さかいさんは縄文時代や考古学をテーマにした親しみやすいイラストを描いています。実際に自分で取材した結果をイラストにしている点が大きな特徴となっています。今回はさかいさんの作品の一部を展示します。

例 言

1. このパンフレットは、平成18年7月18日から9月15日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第19回企画展「JはJOMON縄文のJ」にともない発行されたものです。
2. 企画とパンフレットの執筆・編集は埋蔵文化財センターの宮内良隆が担当しました。
3. 開催にあたり、水戸市教育委員会、美浦村教育委員会、イラストレーターさかいひろこさんから多大なご協力をいただきました。

またつぎの方々からご指導、ご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

嶋志田篤二、川口武彦、川村勝、中村哲也、諸星政得（敬称は略させていただきました。）

縄文美術

日本の縄文土器の特徴は、全面に施される縄文と口縁の突起、把手に現れるような立体的な装飾です。

土器の文様に動物や人間の絵が描かれることは世界各地の土器にたくさんあります。これらは主に顔料で土器の表面に描かれたものです。彼らは洞窟の壁や岩壁に絵を描く習慣をもっていたので顔料を使って土器に絵を描くことができたのです。縄文時代後半に赤色顔料を使うようになるとはいえ、縄文人には顔料を使って絵を描く習慣はありませんでした。たとえ沈線描きの抽象文にせよ、形を描くようになるのは早期後半からでした。縄文土器に描かれている内容は、人や動物などそれとはつきりわかるものではなく、渦巻きであったり三角や格子などであったり、抽象的なものでした。図柄はあるが文様の意味はないと思われてきました。衣装などに使われた文様が、土器に衣装を着せるように描かれたと考えられていたのです。

しかしアメリカ先住民の例では、衣装の文様にせよ、土器の文様にせよ無意味なものはないというのです。織物に込められたパターンにさえ意味があるといいます。しかも記号的な即物的意味だけではなく物語を構成しているといいます。かれらやかれらの祖先がどこからきてどこへ行こうとしているのか、ルーツと未来が書き込まれているのだといいます。だからこそ、土器や織物をつくる技術は、自分たちの物語とともに部族に継承されてゆくのだといいます。この事実を縄文土器に当てはめる事ができるとすれば縄文土器の文様と型式についてわたしたちはいままでとは全く違った解釈をすることができるようになります。



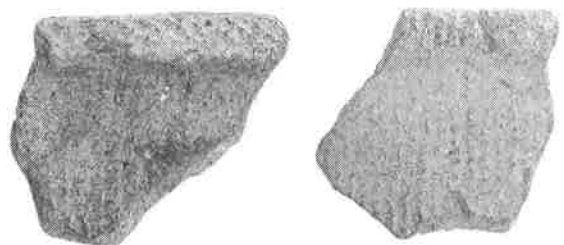
神明遺跡 小型土器の出土

縄文の技法

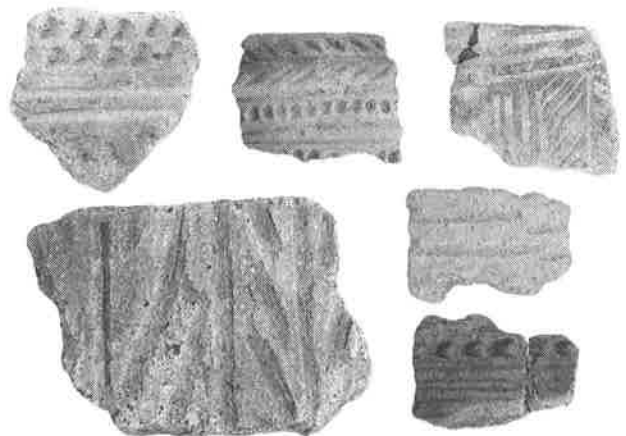
縄文土器の複雑な形と文様は、基本的にはすべて原体の押圧痕と粘土ヒモで描かれています。原体というのは土器に押圧痕の模様をつけた道具のことをいいます。原体には貝殻や竹へら、管状の細い棒などが使わ

れます。もっとも多く複雑に使われたのが縄です。縄をやわらかい粘土に回転させながら押し付けると連続した圧痕が土器の表面に残ります。これを回転圧痕（かいてんあつこん）といいます。縄の撚り方（左撚りか右撚りか、何段に撚るかなど）はたくさんの種類があります。棒状の軸に円や山形の簡単な彫刻を刻んで土器につけた模様は押型文（おしがたもん）と呼ばれます。

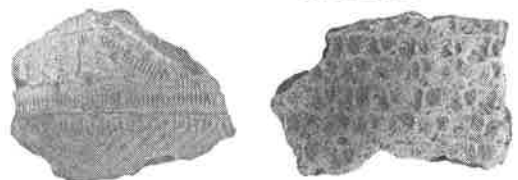
貝殻や竹へらなどは使い方が横や縦にそのまま引いて痕跡を残すものですから条痕文（じょうこんもん）といいます。棒の丸い管状や三角の先端を土器に突き刺したスタンプは刺突文（しとつもん）といいます。



草創期 縄文土器



早期 沈線文土器



前期 羽状縄文系土器



中期 立体的文様の組合せ



中期 立体的な横と平面的縦文様



中期 沈線だけの区画文



中期 横と縦が一体化した文様

棒やヘラの先端で土器の表面に引いた線を沈線文（ちんせんもん）といいます。圧痕文は原体の文様を写すだけです。沈線文は、格子文や三角文などいろいろな文様を描くことができます。反対に細かい粘土ヒモを貼り付けて文様を描いたものは隆起線文（りゅうきせんもん）といいます。

原体の圧痕は土器の表面に対して平面的な描画で、粘土ヒモは逆に立体的な装飾です。原体の回転圧痕や条痕は土器製作のときに表面や内面を平滑に均すために使われる技法です。粘土ヒモは土器の形作りに用いられる輪積みのときの技法です。どちらも土器を製作する基本的な技法で、土器の文様も同じ技法で表現されているのです。

縄文土器の変遷

縄文土器はその制作された年代によって区分されています。これを土器編年といいます。土器の編年は草創期、早期、前期、中期、後期、晩期と6期に大別されて、さらにそのなかで各地域の土器型式が新旧の順に並べられています。土器の型式は形態、文様、技法によって厳密に設定されています。

草創期

もっとも古い段階の土器は、無文土器、隆起線文土器、爪形文土器、多縄文土器、撚糸文土器でした。このうち前半は発生期土器ともいわれ出土例も少なく破片も非常に小形です。

市内で下高井向原遺跡から草創期の土器が出土していますが量は少なく、破片も小形です。土器の形は丸底の鉢形で複雑な形のものはありません。後半になると砲弾型の尖底の深鉢形となります。文様も粘土ヒモを帯状に貼付いたり、器面の全体に縄文や撚り糸が回転施文されているだけでとくに意匠は感じられません。

早期

沈線文土器が主流となります。断面がV字形の鋭い沈線、U字形の鈍い沈線、竹管の先端を刺突することによる爪形文などを組み合わせています。竹管でなく貝殻の縁の圧痕が使われることもあります。とくに区画されることなく器面全体に長短の列点や斜線として描かれています。土器の形は砲弾型をさらに細くした尖底土器です。

後半は貝殻条痕文土器となります。土器表面に区画がつくられ文様が区画内に描かれます。その後土器が2段あるいは3段と多段化し、底部も尖底から上げ底、平底へと変化しました。器形の変化により文様区画も上半部に集約されました。

前期

土器の形は円筒型を基本としていました。底部は上げ底から平底へと変化しました。縄文が発達して多条、異条、羽状縄文など多種類がみられるようになります。

これに加えて口縁部文様に竹管文が発達しました。その後、羽状縄文系の多種類縄文は衰退。しかし文様構成における原体として竹管文と縄文が主体として残ります。

前期後半になると地域的な浮島式土器があらわれます。浮島式土器は連続貝殻文および変形爪形文という特殊な原体手法をもちいた土器でした。

中期

中期土器は、構造的に上半部と下半部にわかれていきます。筒状に下半部を作った後、上部に大形の扇状把手（せんじょうとつて）を加えます。文様は粘土ヒモを多量につかって立体的な装飾になります。上半部の把手部分と下半部におなじパネル状構成の文様が使われます。

次の段階は下半部と上半部で縦と横の文様構成に分離します。上半部は横の文様構成で粘土ヒモによる区画と渦巻き文ですが下半部は縦の文様構成で粘土ヒモは使わずに沈線による直線文です。

さらに次の段階では構造的に上半部と下半部が一体化し、上半部の横の区画文も下半部の縦の直線文も沈線で描かれておりきわめて形骸化した文様となります。

中期の最終的段階では土器の一体化した表面を微隆起線文あるいは沈線で大きく区画して縄文部分と無文部分に分けるだけになります。

後期

後期土器の文様は沈線文がほとんどを占めるようになります。中期には大きな土器をつくるために上半部と下半部を2回にわけてつくっていましたが、後期には大形の土器もいっきにつくってしまうため、文様も複雑なものではなく沈線でいっきに描きあげる手法がとられました。

沈線文手法から発達したのが磨り消し縄文あるいは充填縄文の手法です。沈線で区画した文様の内外を縄文施文の有無で区別する手法です。中期でも単純な文様構成の磨り消し縄文手法はありましたが後期になって複雑な沈線文などの組み合わせなど細かい文様でみられるようになりました。

後半になると沈線文も単純化してパターン化した磨り消し縄文と沈線文の組み合わせだけがのこるようになります。

晩期

後期後半の沈線文と磨り消し縄文の組み合わせでパターン化した文様が主体となってつづいています。後期と異なる点はパターン化した文様のなかに東北地方で発達した文様が入ってくる点です。またそれまで磨り消し縄文として区画内外を縄文施文の有無で塗り分けるという手法でしたが彫刻的に掘り込んで沈線を強調する手法や、まったく縄文を施文せずに強調した沈線だけで文様を描く手法へ変化してゆきます。

終末期には単純化された沈線文による文様だけが残されました。



中期 胴部を無文と縄文に区画



中期 胴部文様を持たない例



後期 深鉢形土器



神明遺跡 土器のまとまった出土



後期 深鉢形土器



神明遺跡 土偶の出土状態



後期 注口土器



晩期 小型土器



晩期 注口土器



晩期
「ミミズク形土偶」頭部

土 偶

人や動物を写實的に描く習慣を縄文人はもっていませんでした。そこで、かれらは得意な土器づくりの技術をもちいて粘土で人や動物の塑像（そぞう）をつくりました。人の形をつくったものは土偶、動物をかたどったものは動物型土製品と呼んでいます。石や骨角を削ってつくられたものもあるので、木製品などもあったと思われます。土偶は祈りの道具といわれますが実際の信仰はまったくわかっていません。出土状況からも特殊な事実はわかりません。古いものは草創期の利根町花輪台貝塚出土の小型土偶があり、乳房表現から女性像であることがわかります。

その後、縄文時代後期の遺跡から一般的に発見されます。やや大型化して写實的には乳房表現、妊娠表現が目立ちますが定型化したものになってゆきます。縄文時代晩期に盛行したのが「ミミズク形土偶」でした。乳房や妊娠の表現はなくなりますが装飾は増えます。平坦なところに粘土の塊をおいてヒトデ形に胴部をつくります。うち1本に頭となる円盤を貼り付けます。顔面は刻みのついた隆帯で円形にかたどるのが特徴で、さらに隆帯で小さな円をつくり目、口、耳を表現して配置します。髪形も特徴的です。顔面から突き出すように立体的に前髪をつけます。さらに頭頂部に真上からみて渦巻状に円盤を貼り付けてほぼ出来上がりです。全身を沈線や縄文で埋め尽くせば完成です。

「ミミズク形土偶」は凹凸があって立体的ですが安定して立たせることはできません。頭に帽子のつばのように髪形がはみだして横にしておくのも不自然で、持ち運ぶのには邪魔な大きさです。文様は多く装飾的ですが写實的ではありません。

陸 平 貝 塚

日本考古学の原点

陸平貝塚は明治12(1879)年、日本人の手により最初の学術調査がおこなわれました。当時東京大学の学生であった佐々木忠二郎と飯島魁の2人により陸平貝塚は発見され、記念すべき調査が行なわれました。調査地点は現在タブの木が茂るA貝塚だといわれています。出土した土器はその特徴から「陸平式」と呼称されていたこともあります。2人は東京・大森貝塚を発掘調査したE.S.モースの教え子で、陸平貝塚についてアメリカのモースに手紙で伝えています。その後、陸平の地には大野雲外、江見水蔭、酒詰仲男らをはじめとする多くの研究者が訪れ、地域にその足跡を刻むとともに、貝塚研究に貴重な資料を提供してきました。

佐々木・飯島による発掘調査

明治12(1879)年7月、東京大学理学部生物学科の生徒であった佐々木忠二郎は、貝類採集のために霞ヶ浦を訪れます。その際、彼は貝塚の探索も行い、陸平の地に大きな貝塚を発見します。遡る2年前、生物学科の教授として迎えられていたアメリカの動物学者E.S.モースによって行なわれた、東京の大森貝塚の発掘に佐々木は参加しており、その時の経験が発見につながったものと思われます。

さらに、同12年の秋と冬には一年後輩の飯島魁と同行し、一緒に陸平貝塚の発掘調査を本格的に行います。二人は自身らの手で陸平の発掘を成し遂げ、ここに「日本考古学の原点」ともいべき日本人の手による学術発掘の第一歩が記されることとなります。

佐々木忠二郎 安政4(1857)年福井市生まれ。東京大学理学部生物学科に進学し、モースの大森貝塚の発掘に参加。欧米留学を経て東京帝国大学農学部教授となる。我が国の応用昆虫学に多大な実績を築き、養蚕の発展にも寄与。オオムラサキの学名にも名を残す。昭和13(1938)年没。

飯島 魁 文久元(1861)年浜松市生まれ。東京大学理学部生物学科に、佐々木の一年後輩として進学。ドイツ留学を経て東京帝国大学理学部教授となる。寄生虫や海綿類の研究に大きな業績を残す。また、水産博覧会水産室の設計を担当したことから「我国における水族館の父」ともいわれている。大正10(1921)年没。

エドワード・シルベスター・モース (Edward Sylvester Morse) アメリカ人1838年生まれ。動物学、貝類の研究が専門。明治10(1877)~13年にかけて東京大学で生物学を教える。ダーウィンの進化論を初めて日本に紹介した。来日してすぐに横浜から新橋へ向かう列車の窓から大森貝塚を発見、発掘調査が行われ日本にお

ける近代考古学の端緒を拓いた。日本の陶磁器や民具にも関心を抱き、ボストン市に持ち帰ったものが「モースコレクション」として、当時の日本の生活を知る貴重な資料になっている。晩年、関東大震災で東大図書館の蔵書が全焼したことを知り1万冊を超える蔵書を寄贈した。1925年没。



明治16(1883)年に刊行された陸平貝塚報告書の図版



明治12(1879)年の陸平貝塚の発掘調査で出土した土器、報告書図版に掲載された土器と同じもの(複製/実物は東京大学所蔵)



現在の陸平貝塚のふもとに建つ美浦村文化財センターここで陸平貝塚を中心とした文化財の調査や研究がおこなわれている。



【さかいひろこさんのプロフィール】

茨城県生まれ 水戸市出身

学生時代から考古学と縄文時代に魅せられて、武田遺跡群や三反田遺跡などの発掘調査に参加。その後、博物館関係の勉強をしながらマスコミの仕事をとおして全国の遺跡に親しむ。その後、フリーとなりイラスト、パンフレットなどのテクニカルイラストレーターとして活躍。栃木県立博物館企画展イラスト「氷河時代の狩人」、茨城県立歴史館企画展「よみがえる古代の茨城」のイラスト、図録製作、ポスター、チケットデザインなど。

